

ただいま、マキとカナはいつぶくに帰って来た。

次郎は窓際で難しい顔し、パソコンと相対している、まりがお帰りと言い、コーヒーとケーキを持ってきた。依然として難しい顔をして、キーボードを叩いている次郎、その隣のテーブルに置いた。

「おお戻った、今までを小生流に、まとめていたら気付かなかったよ、ゴメン」

そんな次郎にまりは言った。

「マキさんもカナさんも、真相究明に一生懸命なのよ、気付いてあげてよ」  
まりにしては珍しく声を荒げる。次郎は頭を掻きながら二人に向きなおり、ありがとうと言った。まりはそんな次郎を見、納得したか休憩したらと次郎にもコーヒーとケーキを。

マキとカナは、革手帳のメモった内側を部分を取り出し、次郎に渡した。  
取り出したところに、新しいメモ紙を差し込んだ。カナは疲れたのか一度大きく深呼吸し次郎に告る。

「今日は何時よりも、聞き込みは大きく進展したと想う。今話すからね」

と言いコーヒーを一口し、ケーキに手を付けた。マキも同感と頷きながらコーヒーとケーキを口に運ぶ。

「次郎、マトリさんの捜査の時、明らかに麻衣さんと同席の男は取り締まりを知っていた。捜査しますと言われ一般人なら、誰彼と言わず落ち着かず、狼狽えるのが普通だと想う、しかし二人は落ち着き払って、どうぞ気の済む迄、お調べ下さいと言った表情だった。と、梨下カラオケ店長の話でした。

手帳にも記してありますが、麻衣さん達が来ている時は、一人二人必ず遅れ

て来て、早めに帰る人がいた。次郎、この人って」

「そうだそれだよ、薬物の取引相手だ。麻衣さん殺害後は、そのグループは来ているのか」

「両方の店も来ているそうです。当初はしょんぼりしていたが最近は元に戻り、賑やかにYYやっているそうです」

「そうか皆元気を取り戻し、アルコール、カラオケライフを満喫している様だ」

次郎は二人の取り出した革手帳の中身を、一通り目に通した。閉じ二人に向き直った。

「皆が行った直ぐ後に、調布署岡山警部から電話が入った。例の六本木のビルに出入りする人物の写真を、調布署に送つといた。その中に先日、仙川町の菊田理沙さん宅に、侵入した人物がいた。写真を小泉昭一に見せた所、向崎徹也と判明。調布署は六本木署に連絡し合同でビルに向かう」

「住居不法侵入、窃盗容疑で確保、取り調べの結果菊田健斗さん射殺事件は解明？」

と、マキは自分達流のシナリオを、次郎の顔を見て言った。

「マキにカナ無念だ。向崎徹也は小柄で、トイレ窓から侵入は容易だと想う、よって実行犯に選ばれたんだろう。捜査員がビルに踏み込んだ時、既に逃亡していた。二階の昭和建設ではうちの社員ではないと言う。四階の弁護士事務所では顧客にはいないと言う。では五階六階の二瓶企画だ、捜査員は挙つて五階の受付へ向かった。」

「こちらの向崎徹也さんに、任意同行をお願いしたい」

受付嬢は、戸惑いを見せたが内線電話を取った。間があつて、

「私は二瓶企画の代表、渋岡隆三です」

と屈強そのものの人物が現れた、しかし話し方は極めて丁重。

「私どもの向崎徹也が、何かしでかしましたか、連絡もつかずここんところ一週間、無断欠勤します、ずぼらな奴で私達も、仕事の手配もつかず困惑している所です。向崎が今どこにいるのか、刑事さん探して下さい」

とか言っておつたと捜査員は言う。

「だけんど捜査員が言うのには、渋岡代表は何か、隠していると想つた」  
そんなふうになっている。

「マキとカナ、次は二瓶企画の取材を頼む」

次郎に言われた二人は各々Vサインする。

「昭和建設の大屋隆雄社長にも合わんといかんな―、二手に分かれて取材したらどうか、どっちへ行くかは二人で相談してくれ」

「今までの二人の搜索で、大里麻衣は間違いなく麻薬の売屋に相違なし。又、カラオケ店、店長梨下さんが言う、武蔵野警察の麻薬取締が、かな振りに終わった。これは明らかに捜査状況が漏れている、それは何所なのか明らかにせねばならん、六本木のビルは今迄と違って仲介者もおらん、リスクも伴うかもしれない、二人はあくまでも週間平成の記者として振舞うように、決して隙を見せてはならない。」

「次郎さん任しといて、私達を信用してください、これから二人で取材日は如何するか、誰がどっちに行くか相談します」

「あつ忘れる所だった、マキ知っているだろう、野鳥写真家の叶山拓也さん、

さつき連絡があつたんだ。某カメラメーカーの新機種が発表された、今度の日曜日、武蔵野公園で、メーカーを交えて試し撮りが行われる、来てみないかと言っていた。是非ともマキちゃん、それとチームいっぷく新メンバー、クロヒヨウさんも言っておつた。二人はどうする」

「行く行く」とマキが言った。

カナも言いだした。

「常日頃マキちゃんから、鳥撮りの事は聞いていました。自分も行きたい、自分も鳥撮りに挑戦したい。でも、ど素人が居たんでは、足手まといにならないかな」

「カナ、心配ご無用、野萱さん永野さん柏田さんも来るんでしょ、年齢不明なおじさんもいっぱいいるし皆親切だよ」

「多分来ると思う、連絡を入れてみる」

次郎は入れ替えたばかりな、最新型スマホを取り出しプッシュ、すぐさま二人にOKした。

「クロヒヨウ鳥撮りデビュー、皆驚きするとともに、年齢不明なおじさん達が寄ってくるよ、自分の装いはマキバージョンで行く、カナも思いつ切りクロヒヨウバージョンで行こうぜ、この取材スーツは窮屈で敵わん、今度の日曜日は脱ぎ捨て本来の服装で行こう」

クロヒヨウが操る、サイドカーは駐車場に滑り込んだ。二人とも長い足を延ばし降り、メットを取った。暖かくなつたとは言え四月だ、真夏になつたらどんな服装になるんだろうかと些か心配だ、マキとカナは生足にペラペラなブラウス姿だ。人目もなんのその、サツサツと歩を進め集合場所の公園

事務所前広場に向かう、既に八十人程だろう集まっていた。

「叶山さんはどこだろう」

見渡し始める。と同じしてマキちゃんと声が、野萱さん永野さん柏田さんが両手を振ってここだと言っている。叶山さんも何時もの様に右手をスツと揚げる、マキとカナは皆の中に入った。早々、野萱さんは言った。

「マキバージョン決まってるね、こちらさんが寺島加奈さん通称クロヒヨウ、クロヒヨウさんも決まってるよ、今日は宜しく頼むよ」

「こちらこそよろしくお願ひします」

カナは身内と想える人達に挨拶する。

「次郎さんとの同級生の叶山です、話は聞いていました、若くスタイル良しだ、新機種の試し撮りではなく二人の撮影会になってしまいそう、無断でカメラを向ける者もいると想う、イヤと想う時ははっきりと断ってください。又、どこことなく近寄り触れてくる者もいよう、お二人は武術の使い手、くれぐれも即、手足は出さん様に、野萱さんも居るし永野さんも柏田さんもいる、遠慮なく相談して下さい。みんな頼むよ」

と言ひ叶山さんは主催者のテントに向かった。お待たせしましたとメーカー司会者の声、皆、テントを中心に半円状に並んだ。メーカーの技術者さんが新機種の説明を一通りした、続いて叶山さんが新機種と野鳥撮影の説明を始める。

「先ずはカメラから、先程メーカーさんから説明があったように、これがミラーレスカメラ5と6です。この二台のカメラは、機能はさほど変わりはないが画素数が違う、5は4500万画素、価格は60万円程度、6が2050万

画素で価格は35万円といったところ、私が試したところ2050万画素でも十分、お金が余って使い道に困っているお方は別ですが、价格的にも6をお勧めします。800-111レンズと共に今日この場でご注文して頂いた方には、2割引きでお受けいたします。大勢のお買い上げをお待ちしています」

と叶山さんは言い、メーカーさんの方を見た。皆頷けどどこか渋め顔をしている。

「メーカーさんも2割引きを了承したようです。では、ここから左に150M言った所にマヒワが群がっている所があります、そこを試し撮り場にします。

一人一台づつとは言えませんが5と6を5台づつ用意してあります、仲良く譲り合って新機種を試してください」

「マキちゃんカナちゃん試してみよう。これが5だ、フォーカスが速く、野鳥の目に合わせ易い、しかも追従すると言う」

と永野さんが言い手に取った。

「うーん軽い、レンズと5で2Kを切っている。これなら手持ち撮影も苦にはならんだろう、しかも沈銅構造になっていて、レンズは小さくなり、持ち運びのかさばりも少なくて済む、持ってみな」

とマキに手渡された。

「確かに軽い、大袈裟に言えば今までの半分ぐらいかな、でも手持ちだと野鳥さんを、ファインダーに入れるのがきついかな」

マキはマヒワさんに向けてブツブツ。

「ブレ機能も五段階、より鮮明に手持ち撮影できる、それがこの機種の良い

所だが今まで通り三脚使用もいいよ、手持ちと併用すればいいんでは、ファインダーに入れるようになったら、手持ち撮影すればいい」

「自分にもできるかな」

とカナが言った。

出来るともと野萱さん永野さん柏田さんはハモった。それを聞きマキはカナに新機材を渡した、カナは手に取り神妙な顔して眺める。レンズが長いが普通のカメラと同じだと、端からは想っているように見えた。

「カナちゃん、どこでもいいからファインダーに入れ、シャッター押してみ  
て」

と永井さんは言った。カナは言われるまま見よう見まねでシャッターを押した。

「カナちゃんほれ、こーすると画像が見える、マヒワが右端に写っているがブレている、手振れ機能が付いているが腕が動き過ぎている、従いブレてしまった、もう一度撮ってみて、そうそうそー構えて」

魏こちながらもシャッターを押した。

「カナちゃん、左手でレンズを持ち右手でカメラをそつと抑える、そーそー、親指で三角印を押してみて」

カナは言われるままに三角印を押す、突如カナはワーツと氣勢を発した。

「写っている、永井さんに皆に撮れた。点にしか映らん鳥さん、それが羽の模様から眼だつてクツキリ写っている」

「撮れた時の感激、それが忘れんよ、それが鳥撮りなのよカナちゃん」ハイと返事しクロヒヨウはマキに言った。

「あの機材欲しい、でもレンズ込みで四十万、二割引きで三十二万だ、分割も選択肢の一つだが今の自分には厳しいな」

そんなクロヒヨウを見、マキは一つの策を想いついていた、マキの目が語っている。マキの策を悟ったか永井さんは、機材を次の人に回し、そんで言った。

「カナちゃん、マキちゃんと一緒に次郎さんに言ってみたら、良い返事が返ってくる事請け合いダヨーン、マキちゃんの目が言っている」

「永井さん、マキちゃんがそんな策を想い、次郎がOKする、その様な事が分るんですか」

「次郎さんもマキちゃんも永い付き合いだ、今日のこの場のマキちゃんの前はそう言っているよ」

もう、カナは誰にも止められないルンルン気分だ。

近隣で痴漢や空き巣が被害があり、いっぷくは昼時と言うのに深大寺の参拝客だろう、二グループのみだ。中央の丸テーブルに次郎とマキにクロヒヨウ、ケンジと理紗はコーヒー嗜んでいる。さしずめチームいっぷくの重役会議と言ったところ、次郎は皆にコピーしたA4紙を数枚づつ配った。

「皆聞してくれ、今までの事件の経緯及び、マキとクロヒヨウが聞き込みし調べ上げたものだ。理紗、思い出させてすまんが、函館での健斗さんからだ」

次郎はコーヒー一口飲み皆を見た。マキが徐に次郎を見、喋りだした。

「住吉漁港での健斗さんの件はその後どうなった、犯人の目星はついた」

「先日、片岡警部補から電話があった、進展せず、無念の心境だった、おま

けに今後は捜査員縮小の方向で進むとお達しがでたとか、苦虫顔伝わって来たよ」

一呼吸置いて次郎さんならどう進むか、聞かせてくれと、片岡警部補は言っ  
て来た。

「そんでどう答えたの」

と、マキが聞いた。

「犯人はどっから来てどこへ行ったか、砂に書いたカタカナのヒともトとも  
読め、漢数字の三にも読めるこの二文字、このダイニングメッセージは何を  
意味しているのか、その辺に糸口があるかも知れんなー、小生はそう答えた。  
そうしたら久し振りに、次郎さんの前向きな声が聞けて、新たな闘志が出て  
きたと言った」

「皆其々にダイニングメッセージは推理してみてください」

と次郎は言い、A4紙に目を落とした。

「理紗の家の空き巣の件だが、侵入者の小泉昭一は、前科九犯の空き巣の  
プロ、向崎徹也は二瓶企画所属と想って相違なし、しかし、金品には目もく  
れずPCと無作為に撮ったデジカメの写真等を盗んだ。これをどう解釈すれ  
ばいいか、皆等どう思う」

と次郎はコーヒを口に運びながら言った。

「PCと写真、二瓶企画にとって都合悪い何かがあったと想う、昭和建設、  
弁護士畠田智樹かも知れん、あの六本木のビルに入居している全てが関わっ  
ているんでは、二瓶企画は要人警護を主としていると言うが、代表の渋谷隆  
三はどこから見てもヤーさんだ。だが喋り方は至って善人風、ソファアのご

ろつきどもは、タトウを見せびらかしていたが、前回の取材では犯罪めいた事は見いだせなかった」

「捜査二課ではどうだった」

今度はカナが答えた。

「はい、捜査二課長大場貞一さんにお会いし、話を伺って来ました。次郎さんが、打診してあったので資料を用意してあった。資料見、説明を聞き自分は現実離れで耳を目を疑った」

「それって何だったの」

マキが口を挟んだ。

「要人警護は何ぞ、どこ吹く風、簡単に言えば地上げ屋、立ち退きや狙いを付けた所に、皆で押し寄せ連日の嫌がらせ、被害者は泣き寝入りする。依頼主から報酬を頂く、二瓶企画はそんな所、問題が生じれば四階の弁護士、畠田智樹のお出ましとなっている」

次郎は無言でクロヒヨウの説明を聞き、書類に目を通している。

クロヒヨウは尚もしべり続けた。

「それ等の仕事は階下の昭和建設から出ている。又昭和建設は所謂美味しい仕事のみを受注している、仕事の流れ、その辺更なる調査が必要だろう。二瓶企画は、更なる疑惑が出てきている麻薬だ、大掛かりな取引もあるが捕まえるは雑魚ばかり、大元が見えん、組織犯罪対策課が調べを進めている。さっきの次郎さんの話を、浪岡浩一警部に言ったら、待っていると云っている。どう会ってみるか」

「はい、お会いさせて下さいと言いました」

クロヒヨウは大場貞一二課長の案内で、組織犯罪対策課に着いた。浅黒く超ミニで、ラフスタイルなカナが現れた、クロヒヨウのお出ました、対策課は、おおっと表情を皆は一瞬浮かべた。組織犯罪対策課の奥まったディスクで、ここだとばかりに浪岡浩一警部は手を挙げた。クロヒヨウは通路を控えめに進む。浪岡警部はソファーに手招きをした。

「寺島加奈」

ですと、例によって週間平成の名刺に携帯電話番号を記して浪岡警部に渡した。

「おおー、クロヒヨウさんは存じあげている、以後はクロヒヨウでいかしてもらうよ、良いだろう」

「はい、一向に構いません、自分も浪岡警部若しくは警部で」

「いいとも」

二人はそんな挨拶を交わした。クロヒヨウはミニの裾を気にしつつ、ソファーに腰を下ろす。同じして婦警さんがコーヒートをテーブルに、クロヒヨウは有難うございますと会釈す。

浪岡警部が言い始める。

「六本木のあのビルは、ビル毎悪の塊なんだが大所がつかめん、さっき言った様に、つかんだとしても雑魚ばかり、薬の売買も行われているが巧妙な手口と言うか、実態がつかめん。組織犯罪対策課が今年に入って、中堅どころを探り当てただけんど、釧路空港駐車場で謎の死、釧路警察大滝警部によればその日、摩周湖、阿寒湖方面へ車で回ったと言っていた。レンタカー会社、デジカメ等の記録で判明した」

「その人って、小金井市の主婦大里麻衣36歳では」

「そうなんだ、小分け売買は無論、中堅どころだ、女とは言え数百万単位の売買も熟している、あと一歩のところまで来たんだが消されてしまった。レンタカーは、大里麻衣が一人で借りに来たと言っている。摩周湖、阿寒湖方面のドライブに、同乗者は居なかったのか、大里麻衣一人だったのか」「自分が小金井に赴き、家族に尋ねた所、中の良い友とドライブしてきますと言っていた。その中の良い友が一緒だったのでは、ではそれは誰なのか、浪岡警部、誰だか掴んでいるのでは」

「クロヒヨウさん、痛いところを突いて来たな、だけど今ん所不明だ、釧路空港駐車場でも、同乗者は確認出来ない。持ち物も女性がよく普通に持ち歩くものばかり、薬なんぞ見当たらん、不審に想えるは携帯電話がない、持たない人もいると想うが三十半ばの女性が持っていない訳がない、致命傷は青酸カリだが、コップ等飲んだと想われるが、容器が見つからない。同乗者若しくは、駐車場で会った人が処分したのでは、そんな訳で自殺ではなくの殺しと、釧路警察大滝警部から連絡が入った。だけど防犯カメラにもヒットせず、完全犯罪と言うか、殺害者が居たとして、どっから来て何所へ消えたか皆目見当がつかんと言っていた」

「函館住吉漁港は、菊田健斗さん殺害と同様だ、殺害者はどっから来てどこへ消えたか、一日違いで二件の殺人事件、何方も完全犯罪だ」

「自分は繋がっているのではと想うのだが」

クロヒヨウは言った。

「クロヒヨウ、良いところで何処か決め手になるは」

「自分が思うにこの二つの殺人事件は完全犯罪です。完全犯罪こそボロが出るもんです、そのボロは何かを探さねばならない、現地に赴き探さねば」　オウム返しに大滝警部が言った。

「二人も殺害されているんだ、危険だ想い留まる様に」

「自分一人では動きません。自分には次郎もいるし、チームいっぶくがある、動くときには全員で動きます」

次郎の名を聞いた大滝警部は、しぶしぶコツクリをせざるを得なかった。

理紗は慣れたもんだ、次郎の雨だれタッチならず、クロヒヨウの言を素早くキーボードを叩いている。

クロヒヨウは大滝警部との話の続きを始めた。クロヒヨウまだあるんだ警部は座りなおした。

「大がかりな薬物取引の情報をつかんだが尽く金振り、摘発情報が洩れているしか思えん。大物議員の闇献金もそうだ、授受の場に網を張っていても何も起こらず。これもどっからか摘発情報が漏れていた、それを突き止めるべく捜査しているが未だ皆無だ。六本木のビルが絡んでいるようだが、しつぽを出さん。我々の恥をさらすようだがと言っていた」

等々クロヒヨウは半時程、大滝警部と相対し腰を上げた。

「クロヒヨウ、人柄だな警部は良くそこまで話してくれたな」

と次郎言い、まりにケーキタイムを要請。ケーキ屋ジジババからの、差しれケーキをマキが用意し、まりがサイホンをゴボゴボ始める。深大寺の参拝帰りだろう数組いたが、今はチームいっぶくの重臣だけになった。

府中署交通課稲垣巡查長が入って来た。

「おや、重臣会議やないか俺も仲間に入れてくれ、今日は非番やましてや空き巣に交通課はお呼びでないだつて」

「稲垣さんのも今、用意しますからみんなと一緒に座つて」

「まりはそう言ってガキさんの椅子を用意した。まりに礼もそこそこに次郎さんと声を掛けた。」

「北海道の件どこまで進んだ、次郎さんの事だ、大詰めを向かえるのと違う」

「まだそんな所までは行つておらん、かじつた程度だ」

「でも次郎さんが、如何様に解決するか楽しみだ」

「おいおいガキさん、小生は今は警察手帳もない一市民だ、殺人事件をどうのこの出来る身分ではない」

「次郎さん、そんな事言うたかて、重臣方々の目が言うてはる、俺にも手伝いさせてくたはれ」

「相分かった、本業を疎かにせんと約束してくればお手伝いして頂こう」

「早速ですが手始めに何から」

「必要とあらば随時行うが、今日までの所は聞き込みは終わっている、住吉漁港で銃殺された理紗のご主人が、砂地に残したダイニングメッソージ、カタカナのトともヒとも読め、漢数字の三のようにも読めるこのこれらの文字は何を意味しているか、ガキさん流に推理してみてください」

「よっしゃ」と稲垣巡查長は膝を叩き、コーヒーを一口飲みケーキに手をつけた。皆のテーブルからケーキがなくなったのを次郎は確認し、言い始めた。

「いいか皆、聞いてくれ小生等は一市民、例え被疑者を特定し確保してもそれ以上の事は出来ない、それ以後は司法にお任せするしかない。大雪山から降り函館の食べ処で、理紗ご夫妻とご一緒した。しかし翌朝ご主人健斗さんの遺体が発見された。

その日のお昼の北斗で帰京する予定だったが、身内の到着は遅れる、一人では心細いと理紗の願いもあり、事情聴取及び遺体確認、東京へ運び出すまで一緒に居る事にした。健斗さんは至近距離からの射殺、警察の捜査は進行するが犯人像が出てこない。健斗さんは電話で呼び出された。至近距離からの射殺だと、顔見知りの犯行と想われる、又健斗さんの携帯電話は見つかっていない。問題は犯人像だ、どつから来て何処へ消えたか不明。

ダイニングメッセージは、何を語りたかったか等、捜査が進行するに連れ不可解な事が多い、函館南署片岡警部補は頻りと首を捻っていた。てなわけで、亡くなった健斗さんの為にも真相究明に手を貸そう、刑事魂を呼び起こしてしまった」

「理紗さん耳塞いどいてね、若い女性に頼まれるといつもそうなんだから」と、マキがつっけんどんに言い放った。

僅か間があったが皆含み笑いと言うか、肩だけが異様に揺れている笑いを見せた。稲垣巡査長だけが、それが何の事か分かるず仕舞いなのか、キョトンとしている。まりが徐に喋り始めた。

「先日三浦海岸で、マキちゃんとカナちゃんは拳銃乱射された。大事には至らなかったが一つ間違えば、と今想うとゾツとします。次郎は兎も角、皆さんの大事な体です。無理です出来ないですと想ったその時は、断ってもいい

んですよ」

「はいまりさん、その時はきっぱりとその様に言わせて頂きます」

マキが言うと、まりの表情が緩んだが、マキの次の言葉にまりはガーン。

「自分等は好き好んで行動しています。何なりと仰せ付けてくれるように、次郎に頼んどいて下さい」

藪蛇だ、まりは余計な事言ってしまったと、ケーキに手を付け始めた。又もやくすくす笑いが女性陣から。頃合いを見て、ガキさんが言い出した。

「俺の姪っ子が、釧路空港でG Aしている、もう嫁に行ってもいい年なんだが休暇を取っては旅をしている。至って推理小説ファン、その中でも西村京太郎オンリー。ストーリーに乗っ取って旅するんだ、この列車に乗車中あるいは、このホテルで殺害されたとか、そんな旅行を楽しんでいる。」

夕飯を一緒にする時なんか、ねねっお母さんならどうする、薬物で殺害する、それとも刺身包丁で一突きなんて言うんだ。それも、しよっちゅう。娘に何とか言ってやって、と姉さんからそんな電話が良くかかって来る、三回に一遍は掛けてやっているんだ。なんせチョーが付くほどの推理小説マニア」

「小生から見れば頼もしい限りじゃーないか、行き詰まった時、手助け願うかな」

「次郎さんありがとう、でも、姪っ子には直接は言わんといてな、その気になつてしまふ、言おうものなら本業を疎かにし、ここに寝泊まり、十津川警部の妹にでも、なつた気分になつてしまふ。次郎さん姪っ子に電話は俺経由でな」

「ガキさん了解した」

と次郎は言った。

稲垣巡査長は一通り喋り終わると、暫くは雑談が続いた。黒目をギョロつかせ、次郎が皆にちよつと聞いてくれと口を開いた。

「刑事の直感と言うか、健斗さんの射殺と、釧路の麻薬バイヤー毒殺は繋がっている、そこに大掛かりな組織が絡んでいる。小生はそんな風に想っている、拳銃も使用されている。大物議員の闇献金も、大掛かりな薬物取引も今だ全容は見えていない、が東都地検に巢があるような気がする、六本木のビルもだ。今までの取材で限りなく黒、だけどどつからどう攻め込めばいいんだ皆、教えてくれないか」

弱音とも想える次郎の言に、皆おやつとした表情を浮かべた。書記役とも言え、今までPCのキーボードを叩いていた理紗が言った。

「今回の連続殺人は健斗から始まっている、東都地検で何かを掴んで射殺されたと、何を掴んだか自分に探させて下さい。自分には信頼のおける人物と言うか同僚がいます、健斗と親しかった人もいます、その辺からかじってみようと思っています。地検は自分にやらせて下さい」

願ってもない理紗の言動に、次郎はポーンとテーブル叩いて言った。

「よーし地検は理紗に頼んだぞだけど理紗、健斗さんの件もある危険と想えたら、身を引き小生等に相談するように、理紗分かったな、それが出来んようでは、今回の件から理紗を外さなければならん」

「次郎さん、私は善悪のつく人間です、ご安心ください」

「誰となく拍手が沸いた。」

「ケンジ方法は問わん、六本木ビルの弁護士畠田智樹を探ってくれ、昭和建設の顧問弁護士と称しているが、実態は違法行為の弁護が主だ。と同じしてその社長の大屋隆雄を、社長業だが旨い仕事ばかり受注している、何かからくりがありそうだ。頼んだぞ」

よっしゃーとケンジは発した。ケンジはそう言ってから頻りと時計を気にしだした、そんなケンジに次郎は声を掛けた。

「ケンジどうした、そんなに時計が気になるのか」

「先日、ガードマン事務所に電話があった、六本木界限で警備の依頼はないかと、あつたら教えてもらえないか。週刊平成の早乙女浩二からだ。何でも昭和建設と二瓶企画の入ったビルだ、その近所で警備をした事はないか、直接の警備はないが近くでならあると答えた。そうしたら知る限りの情報を教えてくれまいか、そんな事だった」

次郎の黒目が動いた。

「ケンジは如何様に答えた」

「警備の依頼もなく、別段気にせずだった」

次郎はすかさずケンジに問いた。

「うーむ、そうか別段どうって事はなかったか、でもケンジあのビルは何かある、それが何であるかは定かではない。次郎さんに相談しようと思っておつたんだ、うちの社で集めた情報によれば薬物売買、地上げ、闇献金等々がこのビルで、はまかり通っているらしい、浩二はそんな事を言っていた」

「久し振りに、まりさんのコーヒーを飲みに行こうかなと言っていたよ、もう来る時間だ」

ケンジの話が終わらん内に、チュワーツと早乙女浩二が入って来た。

「まりはこちらにどうぞと言ひ、椅子を用意し、コーヒーとケーキを浩二のテーブルへ。」

「早乙女、今概要はケンジから聞いた、他に言っておきたい事があるんだろ  
う、聞かせてもらおう」

「次郎さんは、今北海道で起きた二つ殺人事件、それを追っているとケンジ  
さんから聞いた」

「もっか、お手上げ状態でいい情報でも聞かせてくれ」

「我が平成も、記者を現地支社に送り込んで取材を進めている、が一向にヒ  
ットせずだ。次郎さん知恵を貸して下さい」

「目下の所我々も同様だ。言える事は東都地検職員の自宅から、PCが盗ま  
れた、金品には目もくれずPCだけを盗んでいった。殺人事件とこの盗難は  
関係あるんだ」

「早乙女は頭を掻きながら、次郎さんの情報通には叶わんな」

ところで次郎さんと、早乙女は次郎に向き直った。

「書記宜しく、隣でキーボードを叩いているお嬢さんはどちら様」

と聞いてきた。

「紹介しよう、菊田理紗さんと言ひ、函館で射殺された元東都地検の職員  
の菊田健斗さんの奥様です。小生が山籠もりから東京へ帰る時、健斗さん達  
と知り合った、がその晩に健斗さんは射殺された。途方にくれていた理紗さ  
んに、遺体を東京へ運ぶまでを手伝ってと言われた。いつしか刑事魂に火が  
付いてしまう、で、小生は真相究明へ乗り出していた」

「東都地検職員で有った健斗さん、そして空き巣に入られPCを盗まれている。犯人は小泉昭一と向崎徹也の二人組、小泉は前科九犯の空き巣のプロ、もう一人は向崎徹也と称し二瓶企画の社員と判明している。小泉は向崎に、侵入の手配をしただけと言っている、その後接触はない。二瓶企画を探ったところ無断欠勤中、それ以上は何の話も出てこない。明らかに向崎を匿っているしか想えん。東都地検と言えば司法を司る重要拠点、そこで今何が起きているのか、目下のところ小生にも分らん、分かっているのはそこの秘書課職員が、射殺された事、早乙女いいか、完全犯罪とも言える射殺事件、現時点では函館南署もお手上げ状態、平成グループで糸口を掴んでほしい」

「次郎さん、無茶を承知で言っているんだと想うが無茶だよ、所轄も行き詰まっていると言うのにどうすればいいんだ」

「それを突破すればいいだけだ」

次郎は言った。

よう、無茶苦茶の事を言うなど、早乙女は無言でケーキに手を付けた。ケンジが真摯に、早乙女に向き合い言い始める。

「早乙女さん、マキちゃんやカナちゃんそれにガキさんも、皆次郎さんに協力し、真実追及を求め努力している、情報通な部署にいる早乙女さん無くしてチームいっぶくは成り立たんよ、協力してくれ」

大柄なケンジの半ば見下しながらの言に、早乙女は圧倒され、首をコックリす。皆を一周しながら徐にカナが喋り始めた。

住吉漁港の右手奥の、暗がり健斗は「貴方は」と言いかけた時、女性はスカートの中から、消音器付きのワルサーPPKを取り出し、健斗の胸に炸

裂させた。健斗は何故にと言ひ、そんな場に倒れる、「あまり嗅ぎ付け過ぎたから」と女性は言いつた。

女性はスマホに向かい言つた。

「漁港の右手奥に大きな岩がある、その陰に来てちようだい」と言つた。

10分程過ぎると、漁船が岸壁に着いた。赤銅色した屈強男が言つた。

「時間通りだろう早く乗んな」

と言うと女性は、海水で靴の濡れを気にしながら飛び乗つた。乗船すると男はエンジンをかけ、襟裳岬沖に進路をとつた。

「予定通りだね」

と女性は言ひ、男とハイタッチす。

「俺を信じろよと、えりもを過ぎたら、釧路市の幣舞橋を目指せばいいんや」

「分かつた、約束通りこれは前金としての二百万、後百万は釧路に着いてから」

「瑠璃子分かつたぜ」と男は操舵輪をポーンと叩いた。

釧路市の幣舞橋の船溜まり迄あと半時の距離を、漁船は目指し航行している。船長の千田一太郎は仮眠室に寝ている村井瑠璃子に言つた。

「おーい起きろよ、もう直ぐ釧路だぞ、半畳程度しかないがシャワー、浴びて来いよ仮眠室とトイレの間がそうだ、ビニールカーテン開けてみな」「狭ーい、でもいいや汗流すくらいなら出来るね」

「たんべは体中の水分が無くなるのではと想える程、大汗をかいていたと

千田は瑠璃子に言った。独身の瑠璃子だが、特定の男がいるのでは」

「そこん所は黙秘します」

「で、俺は又会いたいよ、電話するから東京で会おうよ」

瑠璃子はウツつと声を発し千田を見た、がOkサインを出した。

「俺も汗を流してくる、操舵輪はこのままで、ずーっと先に橋が見えるだろう、あそこに行く、ずれる様なら操舵輪をその方向に回せば言い、10分位シャワーを浴びてくる、頼んだよ」

瑠璃子はいと言った。自分のバックを操舵室に持ち込んだ、魔王を取り出す、更に小瓶を出した、揺れに気負付け魔王に注ぎ込んだ。千田のスマホと、ワルサーPPkと一緒に海に投げ込んだ。千田が上がって来た。「橋が大分大きくなったな、あれが幣舞橋だよ、あの奥の左に船溜まりがあるそこに行く」

瑠璃子は時計見ながら、後どの位かかるかと聞いた。

「20分かな」と千田が言う。

「この操縦面白いなもっとやってみたい、燃料は大丈夫」

「たっぷり積んである、沖に出てみよう」

指示通り瑠璃子は、操舵輪を右に回しスロットルを押した。20ノットは出るもつと押すんだと言った。小型漁船と言えども早い、波に向かうと強烈なピッチングだ、足を踏ん張っていないと体が安定しない。30分程度瑠璃子は操縦を楽しんだ。頻りと時計を気にする瑠璃子に千田は聞いた。「そんなに時間を気にしてるんだ、それにその薄手のゴム手袋、手につけばなしだった。何か意味があるんのか、

「そんなのどうだつていいでしょ」

「おーそうだな御免」

と言ひ千田は釧路河口の船溜まりに、進路を取った。ありふれたトレーナーだが170cmの均整のとれた瑠璃子に、チノパンともに映える、スカジャンを裏返しに着こんだ。渋いグリーンで決める、今まで着ていた衣服と靴を、釧路市指定のごみ袋詰め込む。船溜まりに着くとハイタッチし残りの百万を渡した。人影がないのを確認し千田と別れ岸壁に飛び移った。すぐさま小型漁船は河口の外に出て行く。

幣舞橋の公園脇に白のレンタカーは止まっていた。

「麻衣、はおはようございます」

と言助手席に乗り込んだ。

運転席の30半ばと思しき女性がおはようと返す。

「時間通りじゃん、それにそのいで立ち、いつものスーツスタイルとは大違い、今日はどうしたの」

「麻衣だってカジュアルと言うかそのラフスタイルは」

「動き回るのにはこれが一番、出かける時はいつもこうなの」

二人はそんな朝の挨拶を交わした。その女性は東京は小金井市に住む主婦大里麻衣36歳。普段は電話仲間と言うか良く電話をかけあっている。今日は偶には二人でドライブしようよと、瑠璃子が誘った。其々仕事がある故現地集合でとなった。

「摩周湖、屈斜路羅湖、阿寒湖三湖巡り。その前に釧路湾を眺めてみたい、そこの先を左に曲がって麻衣」

はいと麻衣は返事しハンドルを左に切った。

「わー凄いこれが夕陽で有名な釧路湾だー」

瑠璃子が叫んだ。

麻衣も隣で思いつきり背伸びをする、瑠璃子が遠くの一点を見つめている。あいつ言つといたのにもう飲みやがったと腹の中で呟いた。

右に左に蛇行する、何故かスピードも上がった。麻衣が言う。

「あの船おかしいよ」

小型漁船の操縦室では

「瑠璃子の奴やりやがったな」

喉をかきむしりながら操舵輪にしがみ付くが一命を落とした。操縦不能になった小型漁船はそのまま岸壁に激突した。

「よーしこれで良しと微かな声で独り言、

「今何か言った」

麻衣が言う。

瑠璃子は別に・・・と、誰が通報したかここかしこでサイレンが、遠くの船での火災、対岸の火事とでも言うか私達には関係ない、さー麻衣、三湖巡りに行こうと瑠璃子は促した。街中でごみ収集車を見つけた。

「あの車の後ろで止めて」

と瑠璃子は言った。

瑠璃子は降り係員に言った。

「朝出し損ないました、これお願い」と言う。

「お姉ちゃんこつちに持っておいで」

と係員は言い、受け取るとパツカー車に放り込んだ。

摩周湖から屈斜路羅湖を回って阿寒湖に着いた時は昼を大分回っていた。

「遅い昼だが何処かで摂ろうよ」

と麻衣が。食事処を探しながら土産物店をウロウロ、瑠璃子でもなく麻衣でもなく店に入った。木彫りが多い20cm大のフクロウを麻衣が購入、瑠璃子は名付きのストラップを探していた。あったと言い購入した。麻衣がその名の人って、誰と聞きよるも内緒と瑠璃子は言った。店を出てブラブラしていると食事処奈辺久のぼりがあった。入ると時間がづれているからか空いている、声もなくお茶が出た。品書きに目を通し、ワカサギの天ぷらそばを仲間さんに告げた。待つ事10分お待ちどう様の声、来て見てびっくり、ワカサギてんぷらの量の多さ、優に東京の3倍はある。二人は多くも味あうが如く、一匹づつ食した。

「瑠璃子、飛行機の時間がある、帰宅時間に掛かると混雑も予想される、釧路空港に向かいますよ」

そうしようと瑠璃子は頷いた。

フライト2時間前に着いた。

「あつ麻衣、駐車場内を私の言うとおりに走らせて」

麻衣はあれつと想いながらも、右に左に走らせ止まった。

「私はこれから車を返して釧路泊、釧路は思った通りに寒いからレストランでバイキング、明日はゆっくり出て列車を乗り継いで函館、名物のヤリイカを食べて泊まり、新幹線で東京へ帰る予定です」

「ヤリイカは市場で釣って食べられると、聞いていますが、忙しないと聞き

ます、食べるなら市場を出た所に、食事処が数件あります、割高かも知れませんが、落ち着いて活き作りが食べられと聞きます、私はそちらをお勧めします。

「今日はありがとうございました、まだ運転するからお酒はダメ、コーヒー買ってくるね」

と言って瑠璃子は建物の中へ。

二つのコーヒー缶の一つに、バックから小瓶を取り出し缶に、液体を注ぎ込んだ。

「麻衣、歩きながら今日を振り返っていたら、二つとも開けてしまった、御免ね」

と言った。

小瓶から液体を注ぎ込んだ方を麻衣に渡した。

「ジャー今日にカンパイしよう」

と麻衣が言い、コーヒー缶をカチンさせ麻衣が一口、途端に喉をかきむしり缶を落とした。

「瑠璃子、これはいったい何の為」

と、声を絞り出し麻衣はシートに凭れた。

瑠璃子は車から降り、運転席側のドアを開けた。シートを倒し麻衣のコートを額が見える程度にして被せた。

「麻衣、今までありがとうございました、だけど麻薬取締官から足がつきそうなの」

瑠璃子は車に一礼し、空港内へ防犯カメラを気にしつつ歩いた。空港内も防犯カメラを避けトイレへ、小瓶の液体を流し空き瓶は空き瓶空き缶容器に

捨てた。

保安所を抜けラウンジへ進む、夕食を摂りながらスマホを出して、電話番号をプッシュ、繋がった。

「完了しました」と

「ご苦労だったねと労った、何か気にかか事はないかね」

「私は、はやてのルリです。誰が企てたと想ってんの、何もありません」

「おっごめんそうだったね、ではゆっくり食事をし快適なナイトフライトをお楽しみ下さい」

「了解」と言い瑠璃子はスマホを切った。

次郎は志田やの、いつものテーブルで魔王を傾けている。

「遅くなっちゃったー、御免」

と言い、理紗が急ぎ込んで入って来た。

「そんなに急かす様な事は、小生は言っておらんよ」

何時ものように、コップに氷を入れ魔王を入れ一息ついた。

「あっいけない、魔王でコップがあふれたよ」

と理紗に言った。

いつもの事だと、呆れ顔で次郎は首をコックリさせる。

「で、次郎さん、今日は何の用事、自分と魔王飲みたくなって電話してきたんじゃないでしょ」

「お願い事があったんだ、だけんどもっと落ち着いてから話す」

理紗は有難うと言い、二口飲んでから深呼吸し椅子に、座りなおした。その間十数秒あったが、要約普段の理紗に戻った。そんな一連の仕草に次郎は

やれやれと言った表情。グラスに残っている魔王を飲み干し、次郎は理紗に喋りだした。

「いいか理紗良く聞け、何がどうなるかは小生には分らん、分かっているのは危険と言うことだ。事実、健斗さんは殺害された、秘書室の不正を調べ確信を得た故の事と、小生は想っている」

と、次郎が言い終わらん内に理紗が言い出した。

「次郎さん、協力します、何なりと仰せ付けて下さい。ましてや自分の職場なら尚更です、次郎さんやります。先日も二課職員が秘書室から出て行く際、何か可笑しいだと頻りと首を振って出ているんです、そんな事がしょっちゅう、そんな折、健斗が重大事掴んだと想います。今は健斗が調べたであろう不正の数々、その書類は全て、秘書室によって回収されてしまい、何一つ残っていない。ゼロからやり直しです。と腕捲りをし、捲し立てた」

そんな理紗を見て、苦虫を潰したような顔で次郎は言った。

「確信を掴んだとしても死んでは何もならない、危険と想える行動は慎むように、その時はチームいっぶくの皆に相談する、それが出来ないならば即、チームいっぶくから外れてもらう、分かったな理紗」

次郎に、その様に言われては理紗は、はいと返事するしかなかった。

「それを確認してから次郎は、メモったA4紙を理紗の前へ置いた。それには秘書室長の村井瑠璃子の家族構成、趣味、特技等」、それに出勤状況及び地検退庁後の行動、その様に記されていた。

「次郎、何故ゆえに村井秘書室長を調べんの」

「今まで皆が調査し集めたものを、小生流に判断した」

「それは何故に次郎流」

理紗が怪訝そうに、次郎の顔を覗き込んだ。

「別にこれと言って確信はない唯、今までの経験と勘でしかない」  
理解したんだろうか、理紗はふーんと言った表情を浮かべた。

厨房で板さんが、チームいっぷくの小会議は完了と見た。女将に掛け声宜しく声を掛けた、料理と半分程になった魔王のボトルを運ばせる。慣れた手つきで理紗は水割りを作り始めた。

「だけんど次郎、何時も飲む時間は二時間と決めていたよね、今宵は三十分若しくは一時間なの」

「それってどういう事だ」

次郎は理紗に何の気なしに聞いた。

「ボトルに半分しか入っていない、三十分とは言わないが一時間は持たないよ」

「あいやーお嬢さん、ご心配なく」

女将が奥から声を掛けた。

「お嬢さんは、日が浅いようだから分らんと想いますが、チームいっぷく用のボトルが、しっかり倉庫にキープしてありますよ、いっぱい飲んで下さい」  
それを聞いた理紗の顔が崩れた。

「理紗、いくら飲んでも構わんが、翌朝に残るような飲み方はせんでな、マキも、クロヒヨウも、それを弁えて、美味しい酒を楽しんでいる。理紗も皆と同じ美味しい酒を飲んでくれ」

次郎、よっしゃーと理紗はグラスをかざした。

「理紗さんも、チームいづくに確りと染まってしまったね」

と女将は笑った。

次郎は理紗の飲み方を見て、大丈夫だろうか些か心配し始める、二人で飲むのは初めてだし量が分からん、はっきり言える事はペースが速まり口が滑らかになった。三十分経っただろうか半分程の魔王が空になった、女将がハイどうぞと言い魔王をテーブルに置いた。理紗は有難うと言い、キャップを開け濃いめの、水割りを作った、おいペース早いが違う。

「違わんよ普通だよ、次郎さんのお代り作ろうか」

「理紗の半分でいいよ」

と言いグラスを理紗に渡した。

「だけど次郎さんは、どう想っているのか分からないがあ室長さん、女の方が言うのも何だけど、かっこいいと想う。スラツとしタツパは五尺七寸程、日々衣装を変えモデルウオーク、モデルさんでも十分通る。そんなモデルさんが疑惑の人とは自分は想えない。次郎さん、自分の見解は以上です、さつき言ったような事を心掛け、業務を熟してまいります」

理紗はグラスをカチンさせてきた。板さん自慢の魚介類が出て来る、食べるに忙しい、理紗だが口が届こうるようになった。マキやクロヒョウのアルコール限度は、次郎は知っているが理紗は不明だ。

「それつが幾分回らなくなった、理紗は一本は無理だな、マンションまで帰れるんだらうか、翌日までアルコールが残るような飲み方はすんなと言った、が朝迄にアルコールは抜けるんだらうか」

何時しか理紗はテーブルに凭れた。次郎は肩に手を掛け揺すった。

「もう飲めません」

とか言い又もやテーブルに伏せた。

「次郎さん送らなきゃならんよ」

女将が言った。

「小生もそう想っている所なんだが、いくら仲間とは言え、こんな時間に独身女性の部屋に行くのは」

「まりさんはまだ仕事やってんの、終わっていたら手伝ってもらったら」  
「うー後三十分は掛かるな、まりは無理だマキに聞いてみよう」

次郎から連絡を受けたマキは、程なくしてこんばんわと言いながら志田やに入って来た。

「ご苦労さん」

と言いながら長さんが厨房から出てきた。

「次郎、いくら美味しい酒とは言えむやみに飲ませちゃならんよ」

「マキ、すまんなー翌日に残さんようにとは言つといたんだが」

「次郎、ほんとに言ったの」

「マキちゃん、次郎さんのいう事は確かだよ、わしは確と聞いたよ」

「次郎分かった、でどうしよう、このままマンションへ送り届けても」

僅か間があり次郎が言い始めた。

「深大寺へ運ぼう、着く頃には、まりもいっぷくを閉め二階に上がって来るだろう、マキいっぷへ頼む」

そう言い次郎は理紗の持ち物をマキに頼み、ヒョイと起用に理紗を背負った。

「長さん、女将さんお世話を掛けましたと言い、志田やを後にした。」

翌朝午前六時、理紗はいつぷくの二階で目を覚ました。

「理紗ちゃん良いお酒だったようだね、ちゃんと次郎が言った時間に起きられたね、もう直ぐ朝飯出来るから顔を洗って、上から下まで私のものだけを着替えて待っててね」

只今と次郎が朝参から戻った。

「次郎さんおはよう」

理紗が出迎えるように声を掛けた。

「おはよう、昨夜の美味しい酒は残っていないようだね」

「美味しい酒はきれいに、消化させて頂きましたご馳走様」

「もう直ぐ朝飯が出来る、一緒に食べよう、食べ終わる頃にマキが迎えに来る。仙川のマンションまで送る予定になっている、マンションに着いたらシャワーを浴び、着替えていつもの時間に地検へ向かえばいい、おー出来た様だ食べよう」

次郎とまりはいつもの朝を迎えていた。いつもと変わる朝を理紗は迎えた。

「理紗、クロヒヨウがいつもの様にケーキを届けに来る、シヨウケースに入れたら、そのまま理紗のマンションへ行くような手筈になっている。クロヒヨウに送ってもらうように」

次郎が言うと理紗は頷いた。

何時もの時間に、理紗は地検の職場に着いた。

昨日のアルコールが、よっぽど美味かったのか半ばルンルン気分だ。

「理紗、何か良い事あったのいつもと違うよ」

と同僚の星華が声を掛けた。

「別にどうって事はないよ昨夜、美味しいお酒を腹一杯飲んだだけよ、星華、呼べるような雰囲気だったら、呼ぶね」

「そんな貴重なお酒、良くそんなにいっぱい飲めたねの、お金持ちのパトロンでもできたの」

「星華、そんなんじゃないの、自分は今危険が伴うかもしれんが、調査し始めた」

「ええー危険って調査ってなんなの」

星華は、興味を示したか身を乗り出し来た。

「いい星華を信じ話する、協力を求めます。だけど先も言ったように極めて危険です、降りるなら今です」

星華は躊躇いを見せたが、コーヒーを一口飲み頷いた。

「星華、もう一度確認する、下手すりゃーここにも居られなくなるし、命に係わるかも知れん。業務終了後この先のコーヒーショップで待っています、その時に協力するか否か聞きます」

そんな事を言い、理紗は星華との立ち話を終え業務に入った。

夕刻、理紗と星華は地検傍のコーヒーショップで相對していた。端から見れば仕事帰りにコーヒーとケーキで癒しているように見える。ケーキを二口、コーヒーを一口飲み理紗が切り出した。

「星華、今朝も言ったがこれから言う事は危険大です又、他言は厳禁です降りるなら今だけどうする」

理紗は背筋を伸ばし、真っすぐに向き星華に言った。僅かなれどそのまま

向き合っていたが、星華が言い始めた。

「理紗、私がこのまま地検職を失えば、親は悲しむだろうし怒り心頭だと思う、ましてや命を亡くせば、私には計り知れない悲しさに陥るだろう。けど理紗、理紗の今日の言動、態度を見ると私には計り知れない事案に、真摯に向かい解決を望んでいる、その様に想える。それを見ているとこんな私でも協力できるかな、そんな風に想っている理紗、私にも手伝わせて」

「星華ありがとう、でも途中で降りる事は出来ないよ、それでもいいんだったら手伝って」

理紗は無言で星華の手を、両手で握り見つめあい頷いた。これからの良き協力者として理紗は確信した。健斗の死、今までのチームいっぷくでの情報等を説明した。

「で、まずは如何様に」

星華が言う。

「秘書室長村井瑠璃子の私生活、並び日々業務終了後の行動です。次郎さんを始め、チームいっぷくのメンバーは、彼女を疑惑大と見ている」

「自分達の捜査は、疑惑大から捜査する習わし、室長に業務上接触する全ての所員が対象だ、自分も目を光らせている。星華頼んだよ」

と理紗は、向かい合った星華の右肩に手を置き、星華の左手を右手でポンポンと叩いた。

あさりの味噌汁に魚の開き、タマゴに納豆でまりと二人、静かな朝食を摂っていた。静寂を裂くが如く、テーブル脇でルパン三世が喚いた。バイブ機能も働きテーブルから落ちそうだ、慌てて箸を置きスマホを取った、浩二か

らだ。

「おお、浩二か元気しているかな」

「元気そのもの、それより次郎さん今日空いているな、とっておきの情報があるんだが」

「そんじゃー黄昏時志田屋でどうだい」

「魔王もいいが、今日はまりさんが淹れるコーヒーがいい、それにまりさんの手作りランチで言い、どうだい次郎さん、魔王より安いと思うが」

次郎はポカーンとした表情を浮かべるも、

「了解、昼にいつぶくで待つ」

と言い、まりの了解を得ずに電話を切った。

「まり、週刊平成の浩二がいつぶくのコーヒーを飲みたい、それとまりの手料理を食したいと言ってきた、明日昼に来ると言っている」

まりは一瞬次郎を見つめるも、コックリを一つ、

「チームいつぶくで捜索中の情報を持って来てくれる。忙しいと思うが頼むよ、小生も卵焼き等手伝うよ」

平日なのにいつぶくは席が略埋まっている、ここ、いつぶくは近隣の所轄警察官のたまり場になっている。事件が無ければ警察官で席が埋まる事もしばし、御多分に漏れず今日はその日の様だ。まりが忙しく動いている、次郎は隅っこの二人席でPCを叩いている。時折馴染みの警察官が次郎さんこんにちわと声を掛けて来る、その都度次郎はヤアーと言い手を挙げる。浩二はざわついている店内を見渡すも、次郎を見つけて次郎の前に座った。テーブルに広げてあった書類を片付けPCを畳んだ、同じして二人は昼の挨拶を

交わした。それを見ていたまりだが、他の客の接客に余念がない、僅かな時間があったが厨房でまりが次郎に合図を送った。

「浩二、すまんーコーヒーが出来たようだ、今取ってくる」

と次郎は言い席を立った。

コーヒーとケーキを、慣れぬ手つきで運んでくる。

「次郎さんは、お手伝いするんですね知らなかった」

次郎は半ばムツと表情を見せた。

「しよつちゆうこんな事はあるんだ」

ヘーツと言った表情の浩二は、ケーキを一口、コーヒーを一口、

「後ほど、ビックハンバーガーとスパゲティが出来ます」

とまりが言った。

「次郎さん、ランチはまりさんにお任せします、今日の本題に入らせて頂きます」

と浩二は言い、コーヒーを口にした。

「我々、週刊平成が掴んだ情報から、先ずは疑惑のデパートは六本木ビルの渋谷区松濤に居を構える大屋隆雄からだ。業務は建設業と不動産管理を経営する会社を営んでいる。とここまではいいいんだが強制立ち退きや、建設業は美味しい仕事ばかりを受注している。明らかに可笑しいのは分かっているんだが、一向にその絡繰りは分からず仕舞い。強制立ち退きはその筋の者を雇い、嫌がらせを繰り返し、入居者をいやいや退去に導いている。ゴタが発生すれば、直ぐさま三階の弁護士がお出ましと相成る。立ち退きさせられた入居者や、地主は泣寝入が常です。とつまー簡単に言えばこんな所、どうだ

い次郎さんこの疑惑マンション」

次郎はテーブルに置かれた、A4紙を無言で眼を通して見る。

「次郎さんも知っているであろう、敷地内に建てられている共同住宅、部屋数は五部屋と少ない、ここにセンター街で拾ってきた未成年者を住まわしている。学力優秀で希望者には大学へ通わしている、そうでない者は自然流に成り行き任せ、決して強制退去はしない。だけど大学卒業の入居者は自分の会社で採用したり、どの様なコネなのか成績優秀者は、驚くなかれ東京地検へ紹介している。卒業者は地検で働く者は多い、この辺の所は週刊平成では未だ判明していない。次郎さん、何か良い情報は無い」

「浩二、お前ならと信用して話す、がくれぐれも公表は控えてくれ、それなら話すが」

「次郎さん水臭えー、且て口止めされて件で公表した事があった」

浩二はムツと表情で次郎を見た。

「おっー、すまんそうだったな」

そんな時、まりが特注ランチを運んできた。

「二人ともそんな難しい顔をしていないで、一息入れたら」

とテーブルに、所狭しとばかりにビックランチを並べた。

「イヤーまりさんありがろう」

と浩二は引きつった顔をして、礼を言った。

「浩二、腹空いているとろくな事を考えんし、角が立つ原因にもなる、冷めん内に食べんとすつか」

次郎に促されて、浩二は手を付け始めた、余裕が出来たかよっぽど腹が

減っていたか、許可を得て次郎のバーガーにも手を付けた。その後コーヒを飲んでみると、顔見知りの刑事さん達が寄ってきて、談義を始めた。昼を過ぎると、警察官等は散り始め、いつもの午後の静けさとなった、次郎達は会談その二を始める。

「阿寒湖で一年程山籠もりをし函館へ、そこで元東都地検秘書室の故菊田健斗さん、その奥様と出会った」

等々、次郎は浩二に説明した。

「よし、次郎さんに協力は惜しまないよ、他言もせん、しかーし次郎さん、解決の暁には当方にいの一番に連絡を、では、まりさん淹れたてのコーヒーでカンパイ」

次郎は苦笑いしカップをカチンさせた。

浩二はA4紙をクリップ止めしてある、その中の一冊を取り出し、次郎の前へ置いた。我々が掴んだ大屋隆雄率いる建設会社、不動産会社の実態だ、全部が美味しい仕事のみ受注、それは明らかに入札に不正があると言って相違ない、先も言ったかな不動産売買や、立ち退きは違法すれすれ、泣寝入も数知れない。未確認だが国交省役人が絡んでいるとの情報もある、再びかなこんなマル秘情報もある、この会社は麻薬売買に關与していると聞く」

聞いていた次郎の目が大きくなった。

「今、麻薬と言ったな浩二」

「はい、言ったそれが何か」

「四月に釧路空港駐車場で、東京小金井の主婦が毒殺されたのを記憶しているだろう」

「あー知っている、レンタカーの中で死んでいたというあの事件」

「そうだそれだ、小金井に住む大里麻衣、ご主人は古物商でれっきとした商人なんだが、彼女はシャブの売人、彼女から麻薬組織解明出来るとマトリさんは睨んでいたんだ、があと一歩と言う段階で彼女は殺害された。マトリさんは無念の表情頻りなんだ」

「次郎さん、その話は週刊平成では掴んでいない、でも次郎さんご心配には及びません、公表は控えます」

「さすが浩二、出来た人間だな」

「まだ何か俺に内緒ごとが」

「浩二に会っちゃー叶わん」

と次郎は言い、背伸びでもしに行ったのだろう、裏口から外に出て行った。まりが浩二の傍に来言った。

「浩二さん、危険と想われるようならいつでも降りて構わないよ、もう二人無くなっている」

「まりさんご忠告有難うございます、俺もチームいっぷくの一員です、皆が頑張っているのに、降りるわけにはいかんよ」

裏口から次郎が入って来るのを見、まりは厨房に戻った。

「おーごめんな同じ姿勢は堪える、幾何の命に必要なのは手足を伸ばし体を解すのが一番や、自分流に体操して来た」

と言って次郎が入って来た。

「次郎さん、まだ俺に伝えたい事があるんでは」

浩二の前で腕組みしていた次郎は、コックリし、言い始めた。

「函館で、東都地検職員が銃殺されたのは知っているよな」

「無論知っている」

「秘書室の菊田健斗だ、三月二十七日午後九時三十分、至近距離からワルサーPPKで射殺された。即死状態だ、最後の力を振り絞って書いたであろう砂に書いたダイニングメッセージ、この文字らしきものは、何を意味するのか、浩二、説いてみてくれんか」

「ウームこれか、最初の文字らしきはカタカナのヒのようでもあるが、あと二文字は見当はつかん」

「浩二、見当はつかんを承知で言っているんだ、それを解けと言っているんだ」

頭を掻き、渋柿を食したような顔をし、浩二は座りなおした。

「もう一つと言うかまだある」

と次郎は言い出した。

浩二は益々渋顔になる。

「住吉漁港での銃殺犯だ、現在、函館南署の片岡警部補も、お手上げだよと言っている、射殺犯はどっから来てどこへ消えたか、皆目見当がつかないと言っている。釧路空港毒殺事件もそうだ、分かっているのは被害者は36歳の東京小金井の主婦で、麻薬の売人、友達と北海道旅行に言ってくる和家人に言い、殺害される数日前に出かけた。マトリさんは後一步で売買ルート解明と言っていた。明らかに口封じだ、浩二もう一つある、そんなに渋柿ばっかり食ってねーで甘柿を食ったらどうだい」

「だって次郎さんは渋柿ばかり食べさすんだもの」

「おーゴメン、次は甘柿と想うよ」

浩二は神妙な表情を浮かべ、次郎を覗き込む、まりがカキをふんだんに使ったプリンを持って来た。

「浩二さんこれでも食べて一息入れて」

と、コーヒールと一緒にテーブルに、次郎は浩二を促し自分も口にした。徐に次郎は喋り始めた。

「釧路港での漁船衝突炎上事件だ、漁船は八戸港の大型漁船。釧路港に八戸の漁船が何故に、そして岸壁へ激突し炎上したのかだ、麻薬組織と関連があるんだろうか浩二、頼んだぞ」

いっぷくの夜の部迄、僅かと想えるが時間がある、まりは浩二にとっておきの夕飯をご馳走した。

その後数日、次郎やチームいっぷくのメンバーは、

「平穏な日々を過ごしていた。昼時次郎はいっぷくで寛いていたら突如、けたたましくルパン三世が喚く、理紗からだ。

「ジツジロウ今、地検から人目を盗んで電話している、ニュースがあるの今晚空いている」

「おい、理紗どうしてそんなに慌てているんだ」

「今晚志田やで、詳細はそんな時、アツやばー室長が戻って来た電話切るね」  
そう言い残して電話は切れた。

「次郎、所詮無理と想うが理紗さんにも、危ないと想える事はやらさないでね」

了解したかキーボードを叩きながら次郎はコックリする。

帳が降りた頃、志田やの片隅に理紗が連絡したんだろう、マキとカナが手持無沙かの様に談義している。程なくして次郎が来、理紗も入って来た。

「オツ、チームいっぶくの重役会議が始まるようで、特製のつまみを作るから」

と厨房で大将の声が上がった。

マキが手慣れたもんだ、魔王をお湯、氷、ミネラルウォーター、梅干し等々で皆好みに作った、そしてカンパイの音頭を取った。次郎は一口二口、口を湿らせ理紗に声を掛ける。

「理紗、本題に入ろう」

理紗は皆の前にA4紙を配った。

「これがここん所一か月間の村井秘書室長室長の行動です、箇条書きにしてあります、今一つづつ説明します目を通してして下さい」

と言ひ喉を潤した。

「親秘書課長派も多い、よって不審がる地検職員もいる、聞き込んでいると、何を調べているんだと突っ込まれる事も、従いここいら編で一区切りつけたい、聞き込みを終了し今までの事を報告します」

すまなそうに理紗が言うと言ひ、そんな事はないよと労を労う。理紗は箇条書きしたメモの説明を始めた。その一、地検上層部の中に情報交換の内幕者がいる、東都地検総長への提出物は全て秘書室長を経由する、そんな中特定は出来ていないが、秘書室長と半ば黙認するが如き、やり取りもある様だ」

「危険過ぎるなー、慎むように」

「健斗の仲間だった職員からの情報だ」

「理紗でも、健斗の友人でも、危険と思われる行為はせんように」

「たっぷり足突っ込んでしまった、もう後戻りできんよ次郎さん」

次郎は、顔をしかめながらその二は何だと聞いた。

「時折、特定の職員が、私用とも業務ともつかん事をひそひそ話を」

「先日ひそひそ話を見受けしたんでわざと、書類を届ける振りをし、傍のデスクに行った。なっなんとシヤブとか薬とかをひそひそ」

「それって俗に言う薬物の事かえ」

「だと想う、その人は地検では重要ポストにある人だよ」

「気が付かれたとしてもすぐさま、理紗に危害を加える様な事はないと想うが、危険はある。あんまり寄り付かんようにな」

「はい、デスク周りの友にそれと無くお願いしてあります」

「その友とかいう女性に危険はないだろうな、それとその女性は信用できないのか」

「できます、チームいっぷくに入れても問題ない、そんな友です。それと男は一般的に、女性が近づいて来ても嫌がる人はいない、と想います、同じデスク周りなら、尚更怪しまれんと想う」

お任せはするが不審がられたら、手を引くようにと次郎は言った。

「で、第三は何だ」

「六本木の、あのビルに入居している会社や弁護士等です。昭和建設、昭和不動産、二瓶企画、相谷弘樹弁護士等は真っ黒です。彼等は度々秘書室に来ては衝立の奥で、内容は分からんが村井室長と会っている。受付を通れば

誰でも秘書室には入れる、慣わしなのか、誰が入ってきてても不審がる人はいない」

と秘書課長の生稲五月女史は言う、と言った理紗の話に次郎はマキとカナと顔を見合わせた。

「皆、その四を話すね、秘書室長の村井瑠璃子の件です」

「以前、言ったかもしれんがエリート街道まっしぐらで数字の達人、計算は電算機より速い又、頭が切れると言うか判断が適格で早い。そんで秘書室長へはとんとん拍子。部下想いと言うか定時退庁が常、そんな所が秘書室では人気がある」

次郎やマキとカナは無表情で理紗の話聞き入っている。

「ここ迄だと、優秀な女秘書室長と言ったところ、だが自分の私感なれど、時折その筋と想える様な男が面会と称して来ている。周りの人に聞くと、村井室長がこの部署に就任した当時から週に一二度見えている、決まった男ではなく時折変わっていた」

「皆に不審がられる事はなかったか」

次郎が聞いた。

「あのような男は刑事にも多い、何処か所轄刑事が、確認やら連絡に来ているんだろう、皆は言っていた」

「秘書課でそう言っているんなら、そう想うしかないな、そのほかに室長に關して何かないか」

と次郎は何杯目かの魔王を空にした。

「こっからは自分の推測も入っているが、年齢不明、離婚経験があるかも不

明だが独身、小学生位の子供が居ても可笑しくない、自分はそう想っているが広尾のマンションで、一人暮らし。退庁後の行動は人それ言う事が違っている」

三人はグラスを置き理紗をみた。

「六本木界隈の高級クラブで静かに飲んでいる、トンボに腰掛け中むずましく、グラスを傾ける光景も確認されている、あれほどの美貌の持ち主が一人で飲んでいけば、世の男性が放って置く筈がない。・・・その後ホテルへ、と自分流に推測してみたんだが事實は不明。又室長は登庁日は必ず九時千ヨイ前には来ている、土日祝は休みで普段は殆ど休まない。あれは三月下旬だったと想う、三日程休んだ事があつた、と総務課の人が言っていた」

次郎の黒目がギョロ付くと共に大きくなった。

「三月下旬と言えば、ご主人の健斗さんの射殺事件、それに釧路での毒殺事件と漁船の激突炎上事件と被るな」

そう言つて次郎は空になったグラスを見つめている。次郎作ろうかの声も聞こえないようだ、マキは目の前で手を振つた、我に返つたか、オツ御免と言つて、次郎はマキの前にグラスを置いた。

「次郎ったら、もう全く、直ぐ固まっちゃんだから」

マキが口をとんがらせながら、水割りを作り始めた。そんな次郎とマキのやり取りを、クロヒヨウは楽しんでいる。